夕刊
十二月十四日發行
定價一ケ月金六拾錢
磐城新聞社
日曜祭日翌日休刊

今井邦子女史の近業
『和琴抄』を中心として (4)

島田忠夫

そこには寸尺の隙もなく氣を張つて構へてゐる。今井女史の隨筆は半ば『歌』であり、半ば『こころ』である面白味は兩者にあり、滋味は後者に多い

『忙中閑を見出す工夫』『私の母性愛觀』『結婚後の戀愛』『若き女性と社交』『時代の犠牲者』『すぎたる愛』等の文章は、今井女史が社會的に活躍せられてゐる（或は活躍せしめられてゐる）積年の經驗に基く叫びであつて、そこには何々女流教育家流の歪められた論法もなく、型式張つた訓戒もなく、道學者めいた立言もない。今井女史が謂はば人に語るともなく、みづからの記錄のために物された如くでもあり、何よりも深い同情に準據したものの見方が、讀者に強烈な感激を與へずにおかない。この項も私にはよき勉强となつた

『病詩人・夜雨先生の靈前に語る』の文章も寔に切實であり、虔ましくあつて心打たれる。常陸野と題する短歌に、左の如きがある

筑波根詩人と呼ばれし夜雨氏の葬儀に列して　（錄）

常陸野のこのもかのもにかすみ見ゆ森はすなはち人住む邑なり

筑波根の二根のなだりささらぎの日は照らしあて心かなしき

遠ひろき常陸の野らに立ちて思ふ邑に神代ゆいくら開けし

この家の木目すれたる古き緣に目かけしてみ子は吾をみしなり

南より日のさし入りし古りし部屋に柩を開けて君を惜しめり

心をば花に向けむと作らせし園の草の名をきかましものを

常陸野の寂し村居の道を來て君が柩に思ひ向へり

對象にひたむきに迫つた感情の手固さ。上辷りせぬ感情の表現。やはり當代女流歌人の中で高所を占むるだけの重みがあると私は思ふのである

おもむろにたどろふる身か茶の花のさかりとなりし庭に思ひぬ

秋の空ふかく澄みたれいほひてありし日ごろはろけきごとし

熱出づる氣配怖ちつゝ安らかに保たむこころ茶の花に寄す

門川のあふるる音ぞ止みて星夜となりしと夜ひびきぬ

靜かなりし雨荒れいでて夕に入らかかるおのおのきに熱出でむとす

傲恣すでに久し

矢吹正衛

茶の花に照る日あかるし熱出でて一夜悶えしは昨夜と思へず

曉霜所見

珠雲　小野務牛

啓明猶見燦養晏
脈々備寒曉氣新
瀟地霜黃花愈好
籬邊餘得似陶人

秋風とひまはり

辰巳和子

一つ　二つ——
ひまはりの花が枯れて行く
あゝ　秋が來たのだ
もの皆が凋落の秋なればひまはりよ
汝れも日毎にうら枯れ行くか
ふく〳〵と
ひまはりの種が出來る頃
おそ秋の風は
うら枯れたひまはりの葉
うそ寒い風吹く夕べ
枯れ果てた葉は地に落ちつくし
太いあの莖が　たゞひとりもと——
やがて淋しい冬が來る

いはでものこと

並木秋人

4

かうした私の崇高の願望に、ひたすらにおのれを知つてくれる作曲家、歌手を求めた。いや、あのれ以上の藝術家を求めた。が、事毎に失敗に終つたのは、組織に於て缺けたものがあつたからである。物質的に依據するものがなかつたのだ痛恨に堪へないのは、それに堪へ得る人がなかつたことではなく、さうした組織に無關心な音樂家の態度である。國民歌謠協會の恥づべき末路は、實にそれでしかなかつた。キリストを賣つたユダヤは、呪はれた彷徨者ではある。が、キリストたり得ない私にとつては純文學の消失は、レコードすくなくとも、もろもろの民謠をして、詩を土足にかけたものは組織の上に立たないものは、かゝる眞理ではないかゝる眞理が眞理ではないといふことを痛感する

馬鹿にも悧口にもなれぬ中途半端の態度が呪はしいが、私は、たつた一人で、作曲を歌手を組織化する——音樂に君臨する時運のめぐり來るのを待たう。決して失望はしない。『とかくやくざはくろうのたね』『それが全く何の表現かは知らずに却つて魅力がある』

うら枯れたひまはりの種が出來る頃
度目がこれ、三度目がいちばんの大物だ。彼奴等その準備中だ、彼奴等この島原屋をつけねらつてゐる。當家の祕密が、どうしてそんなに筒抜けに洩れるのか今う、是非生け捕りにしたいものだ』

『御懸念なく萬事お任せ下さい。では早速手配にかゝります』

『わしは仙鶴樓で夜もすがら見て居る』

仙鶴樓といふをは三層のや四ッ近うございます』

『今夜は何か騷がしいやうだな』

神道はニヤリとする

『いゝ、別に……』

『さうかな』

隣室に夜の支度が出來てゐる。神道天嶽の二人は入つた

おなじ服裝の接待人が二人、戸締りを手傳のに來たさうして燈火を消し終ると

『御滅燕よろしう、おやすみ……』

彼等の聲が靜かに消え最後の出入りの戸が締つた

大盜は何事も知らぬかの如く臥床に入つた。西の空には積亂雲がやはり突兀としてそびえてゐる。其ほかはさんらんたる銀河、ひやゝかに更けて行くのだつた

『御苦勞ぢや。やすみますから、戸締りを』

天嶽の聲はおごそかに、しかも物やはらかな態度である

『かしこまりました。もはや』

太陽の無い階級へ 温い救ひの手が伸びる

年末の急場を助成會の活動

殘りすくなになつたカレンダーの一枚〳〵剝がれる毎に神經が尖鋭化して行く――此の師走狂躁曲の裏にかり來るべき正月の樂しさも描かれず、灰色の暗雲におし込められてゐる極貧者の救濟に就いては既報の如く平助成會が愛國婦人會と提携して乘り出した、さきに四千八百枚の同情袋を各區に配付し愈々昨十二日から『氣の毒な人々を救え！』の大旗をおしたてゝ戸別訪問を開始、應分の義捐金を募つてゐる、近く各區から出される救濟人員調に基いて町當局が詮衡、この隣人愛の結晶によつて太陽なき階級にも一縷の光明が見出されるわけだ

水害で數ヶ所に亘り欠潰したので猪狩村長以下村議有志が昨十三日出縣これが急促改修方を陳情したが改修費は大体三萬圓位を要するものと見られてゐる

佐藤代議士 歐米視察談 新歸朝の佐藤庄太郎代議士は明十四日午前十時から磐城中學校に於て同校生一同に歐米視察談を行ふ、なほ磐女では來る十七日以後同上をきく筈

面倒を見てやる

九十軒二百五十名

年末とカード階級

現在町當局が毎日二十錢乃至三十錢宛温い救護の手をのばしてゐる第一種カード階級は十五軒（人員四十名位）で盆と暮の二回に亘り金品を贈つてゐるもの（第二種カード階級）が七十六世帶この數二百十八名に上つてゐる、次はその第一カード級中殊に吏員の心を曇らせた極貧家庭である（氏名何れも假名）

◇長橋町の小山カメ(七〇)さんは多少精神に異狀を呈してゐる孤獨者、さきにこれ亦孤獨の淋しさから移つて來た山中ハル(七二)さんが中風にかゝつて半身不隨、最近では材木町に住んでゐた佐竹マツさんも移つて共同生活を營んでゐるが、こゝに住んでゐる人々はほんに働く自由を失つて露命をつないでゐるのみ

◇田町の野田佐吉(七九)爺は妻イネ(七三)さんと北海道に渡つたまゝ音信不通となつた賴みの息子の身を案じながら辛ふじて暮してゐたが、最近では夫婦共病氣になつて起居も困難な苦しみ

◇四軒町の植木行商小山松吉(五三)さんは幼兒四人を抱えて妻に死なれ、又鎌田町の裏長屋に一人住ひしてゐる山木重平(七六)爺は此の寒空にも毎日古物買ひのガタ車をひいて『身寄りのねゝ俺は役場の世話になるしかねゝ』と身の不遇を歎いてゐる

奉祝記念事業に

圖書と書方募集

平町三小學校の企て

平町各小學校では、來る二十三日の皇太子殿下御生誕記念奉祝事項として既報の如く兒童から綴方、童謠圖書、書方を募集するが書方の揮毫文字は左の如く決定した

尋一―ワウジサマ 二―日つぎのみこ 三―日嗣の皇子 四―天津日嗣の皇子 五―千秋萬歲永無窮 六―萬邦無比皇統連綿 高一―瑞雲獲天 祥氣滿地 二―聖壽萬歲寶祚無窮

小名濱の大動脈

上水道計劃着々進む

鮫川水源地から取水か

小名濱町上水道計劃は既報長に申込まれたいと、會費の如く三千四百圓の調査費五十錢も繰つたので明年五月迄調査並に設計を完了、六月上旬起工の豫定である、同水道は鮫川水源地から取水自然流下（工費四十九萬圓）並に鮫川江筋から電力揚水（工費三十二萬圓）の二計劃に基き調査を進めつゝあるが將來を考慮して前者の自然流下案をとるらしく何れも五萬人に給水の見込で來る十二年三月迄には竣功の豫定である

茨川改修陳情 赤井村大字赤井地内茨川下流は過去三ヶ年間三萬五千圓で改修したが上流地内約千二百米は未改修の上過般の風水害で數ヶ所に亘り欠潰したので猪狩村長以下村議有志が昨十三日出縣これが急促改修方を陳情したが改修費は大体三萬圓位を要するものと見られてゐる

。。。